

論文

『創世記』に見られる女性観
—エバをめぐる—

木村晶子*

はじめに

人間社会においていわゆる文明というものが始まって以来、男性と女性の平等性は失なわれてきたという歴史がある。プラトンやアリストテレスによる初期ギリシアの思想によれば、男性こそが理性的存在であり、女性は男性によって子孫を残すための身体的存在であるという理解である。女性は本質的に男性に劣る存在であり、完全な「人間」とは男性だけであった。女性は従属的・奴隸的地位にしかなかった。さらに、女性こそが男性の破滅の原因であり、彼女らによって最初に人類は墮落し、罪悪はまず女性からもたらされたのだから、女性には用心深く接するようという考え方が中世ヨーロッパ社会に、つまりキリスト教社会にも浸透してきたのである。現代社会においてはこれほどひどい解釈ではないにせよ、いまだに女性に対する偏見はみられる。

本論においては、創世記にみられる女性観を再考し、なぜ聖書解釈においてこのような偏見が生まれてきたのかという原因を探り、人間の本質や男女平等がどのように表現されているかをみていきたい。

1. アダムとエバは平等ではないのか

最初に創世記1章26節～27節を見てみよう。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神はご自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

「神にかたどって」という表現はどのように解釈されるであろうか。26節の「ご自分のかたち」というこの「ツェレム（かたち）」という語は重要である。神にはいわゆる人間と同じ「形」はない。だが、「神にかたどって」ということは、人間存在とはかけがえのない尊厳と品位と、独立した人格を持つことを意味している。そして、「人」は神を認識できるものとして、神と語りあえる相手として造られた、ということである。ここで読み取られる最も基本的な教えは「男女を問わず人間が交わりの存在すなわち人格として造られているということ」である。¹ 神との関わりの中で生き、神の呼びかけに応答することが人間にとって最も中心的なこと、基本的なことだと伝えたいのである。男女に関係なく、人は神

* 藤女子大学人間生活学部人間生活学科教授

に属するものとして造られているのだ。人は神から祝福され、「極めて良い者」とされているのだ。

男性も女性も「神にかたどって」造られているということは、人は神に依存しながら生きているということである。神に似せて創られたのだから、神となんらかの点で関係がある、もしくはどこか共通している点があるということである。それは、神の霊に感応する働きを私たちの心に与えてくださっているということである。²

次に 1 章 28 節の「神は彼らを祝福して言われた。産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」という箇所に触れよう。ここでは、男女ともに、共同で果たすべき崇高な使命が神から両者に同等に与えられる。すなわち、人も神の創造の業に参与し、神の姿に似ていることから、他の被造物とその創造者との間にいわば代理者となって立ち、神の権威に似た権威でもって治めるのである。³

したがって、地を管理する能力は男女とも有しているのである。28 節では、地を満たし、地を従えるようにということが男女双方に向けて言われているが、管理することは男が担い、生殖に関することは女が担うという分業のようなことは言われていない。男は理性の領域を担当し、女が感性の領域を担当するというような、すみわけのようなことを提案することばも見当たらない。⁴

続く創世記 2 章 7 節では、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」とある。「アダム」あるいは「アダーム」という名詞の理解であるが、「アダム」とは個人の名前ではない。いわゆる「人」の総称であり、英語でいう man に相当する。つまり、「人」でも「男」でもある。だが、このヘブライ語「アダム」・「アダーム」は「アダマー」、つまり「土」に由来する語である。「人」は「土・ちり」から造られたのである。したがって「人」は「ちり」から生まれ「ちり」に帰るというのが、聖書にいわれていることである。この点において男性も女性も違いはないのは明らかである。

ゆえに、最初に登場する「アダム」は、「男性」というより「人」と捉える方が妥当であろう。

（2）ふさわしい助け手

『創世記』2 章 18 節～23 節を解釈するとき、しばしば女性は男性と平等であると理解されないばかりか、男性の「助け手」として補助的に造られたのだと言われる。そのような根拠が本当にあるのだろうか。この箇所を見てみよう。

主なる神は言われた。人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。……人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。主なる神はそこで人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れてこられると、人は言った。ついにこれこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャ）と呼ぼう
まさに、男（イシュ）から取られたものだから。

初めは男性がひとりで存在しており、神は男性を助ける者としてあとから女性を造ることにしたと受け止められがちである。しかし、18 節の「人がひとりでいるのはよくない」というときの「人」は「男」とは限らない。総称としての「人」と捉えることができる。稲垣が述べるように、男と女としての創造を記す 18 節以下を時間的な「前後」ととらえ、男が先に造られたと解釈する必要はない。⁵

さらに、前にも述べたように、創世記 1 章 27 節を見ると、「神は人を神にかたどって造られ、男と女とに創造された」と記されている。ここでは、神は最初から人を男と女とに造られたのだ。男性にとって何か足りないから、男性を補助するものが必要だから女性が造られたのではない。創世記 1 章で神は人を創造したのち、お造りになったすべてのものを「見て、それは非常に良かった」と言う。つまり、人は最初から完全なものとして創られたのだ。「ふさわしい助け手」とは、必ずしも相手に不足している何かを補うという意味を指していないのだ。⁶

女性は男性の補助として造られたわけではない。本来神が完全なものとして造った人を、欠けた部分を補わなければならない者であるかのようにとらえるのは、「非常によかった」という記述にそぐわない。この「ふさわしい」と訳されていることばは、一方が他方を補う立場にあるということではなく、互いが「向き合って、対応して、はっきりと前にある」ことを指す。つまり、双方が同等である関係と言う。両者に互いの優劣や上下はない。⁷ この「助ける者」とは、決して自分より弱くて、命令どおりに動く者という意味ではなく、「力を添えて協力し、支える」という意味に用いられている語である。人は独りではなく、他者とともに生きる存在として創造されていることがわかる。⁸

ここでの教えは、男女が対等で平等であることだ。男女は互いに相手を必要とし、相互に補完し合う関係にあることを示している。つまり、共同体の原型である。対等な人間同士で、はじめて共同体が生まれるのだ。動物では不完全なのである。

次に、あばら骨から女性が造られたというのは何を意味するのだろうか。「あばら骨の一部」とは、胸元の、上でも下でもなく、並んでいる部分を取られたと言われる。人（アダム）のあばら骨から創られたということは、男も女も神が創造され、同じ素材で創造されたということである。⁹

この部分に関してマイリスは次のように言う。

なぜ神は女性を男性のあばら骨から造られたのでろうか。もし男性の頭から女性を創造したなら、女性が男性を支配したかもしれない。また、もし女性を男性の足から造ったなら、女性は男性の奴隷になっていたかもしれない。しかし、神は女性に男性の仲間になってほしかったし、男性と同等であってほしかった。だからこそ、男性のあばら骨から創造されたのだ。あばら骨は心臓に一番近いところにある。つまり、男性と女性是一体であり、「あなたは私です」と互いに言うことができる。¹⁰

このように見れば、決して女性は男性の一部から取られた二番目の存在ではない。あくまで、対等な関係であることがわかる。

男が「これを女（イシャー）と呼ぼう」と言った場面であるが、男が「女」と名づけ、命名という行為によって男が女に対し権威を行使したととらえられることが多かった。しかし、「女」ということばは、22 節の「神が・・・女に創り上げた」とあるように、すでに登場している名称にすぎない。興味深いのは、23 節になって初めて現れる「男」ということばより、22 節で「女」ということばが先に登場していることだ。つまり、女の紹介が、男の紹介より一足先になるのである。¹¹

神が女を造り上げ、連れてくるのを見て、男が直ちにそれは神の造った女であると認めているのである。また、自らが男であることを認める箇所でもある。つまり、男と女は、一方が女性として存在するのでなければ、もう一方は男性として存在することにはならない。男と女は「一方の次に他方が造られた」のではない。両者は同時に造られたと解釈できる。¹²

男のあばら骨から女が造られたことは、一つの同じ肉体を源としていることを表す。23 節で、男は、女が同一の本質を有する者に造られたことを喜び、それを歌っている。「イシャー（女）と呼ぼう。イシュ（男）から取られたから」とは、そのなかにあるかけことばであるが、これは、男女が一致と親和の関係に置かれた同等の者として神に造られたことを喜んでいる詩なのだ。¹³ この場面こそが「楽園」の状態といえるであろう。

こうして次の 24 節に続くように、「そういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、ふたりは一体となる。」のである。「一体となる」とは、夫と妻がふたりでひとりとして存在するものとなったと受け取られてきたが、聖書ではあくまでも、ひとりの人間はどこまでもひとりの人間として描かれている。一つになるというのは、どちらかが一方を飲み込んで人格を消してしまうことではない。それぞれの人格は保たれながら、おのこの意志に基づいて行動するのであり、あくまでも自分のした行為に対しては責任を問われるのである。

2. 罪は女から始まったのか

エデンにおいて男と女は神に守られ、神との関係が保たれていたが、創世記 3 章には蛇の誘惑により、人は神に背いてエデンの園を追われるくだりが語られる。

主なる神が造られた野の生き物うちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」女は蛇に言った。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。（創世記 1 節～7 節）

ここで、よく指摘されることは、女がまず蛇にそそのかされ、次に女が男を誘ったため、

男も食べてはいけない実を食べたという点である。したがって、罪に対する責任があるのは女であるというのだ。この解釈は次第に誇張され、キリスト教の歴史においても、悪の根源は女性であるかのように伝えられてきた。女性にとっては実に不名誉なことである。なぜこのように女性に汚名が着せられるのであろうか。

蛇の誘いは、「もっと賢く見分けられる知恵が手に入るかもしれない、神のようになれるかもしれない」と、より良いもの、よりおいしそうなものへの欲望に人間を導くことである。神は「園のすべての木から取って食べてもよいが、善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」と、男と女の安全と幸せのために寛大な配慮をなさっておられるのに、その神の配慮をねじまげ、あたかも神がひどく規制されたかのような暗示を含め、蛇は神との関係破壊を試みた。これが誘惑である。¹⁴「女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた」のだが、「あなたが私と共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」と男は答える。この出来事は自分ではなく女のせいだと責任転嫁するのである。だが、男も誘惑に負け一緒に食べたのであるから、男も同罪である。さらにもっと悪いことに「あなたが与えてくださった女が・・・」と言い、「そもそもあなたが私に彼女を与えてくれなければよかったのに・・・」と神のなさったことに対して異議を唱えているようにもうかがえる。男はまったく自分の非を認めていない。この点では女よりもさらに罪は重い。

神はまず、男に尋ねる。神は、責任は男にあることを示される。神のことばが最初に与えられていたのは、男である。したがって、彼が妻を守り、罪と戦い、一緒に蛇に立ち向かい、共犯になるべきではなかったのだ。¹⁵

人間はなんと無責任なのか。神から知恵を与えられ、神の話し相手として選ばれたのに、その知恵の用い方を間違い、神から離れてしまっただけで人間存在の意味がない。そして、自分が責任を持たず、他者のせいにする知恵においては、男も女も同じ罪を犯しているのである。

こうしてみると、同じ罪を犯しているのに女のせいにされる原因は、やはり父権的な社会の構造にある。その中では、物事は男性中心の解釈がなされる。男が先に造られたので、男が偉く、人間の中心だというように受け取られ、男を援助するのは女だと思われてしまう。また、禁断の木の実を先に食べたのは女だから、罪は女から始まったとすべての罪を女のせいにし、不都合なことはみな、力の弱い側にある女性にかぶせ、女を男より下にある者のように扱ってきた歴史がある。このような「力による支配」・「男性の優位性」が父権制であり、女性のしたことはマイナス評価だけを受けてきたのだ。¹⁶

だが、罪の結果として、結局女は男の支配を受けることになったのではないかという見解もある。確かに創世記3章16節から19節を見ると、そのように受け取れるかもしれない。

神は女に向かって言われた。

「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。

お前は男を求め、彼はお前を支配する。」

神はアダムに向かって言われた。

「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。・・・」

お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。」

16 節の「彼はお前を支配する」ということばは「男が女を支配する」ことになるのだろうか。これは神からの罰としてこのような支配関係になると神から言われているのであろうか。しかし、この箇所が指しているのは、神が定めようとしている「秩序」ではなく、男と女の関係が損なわれてしまうようになる「状態」のことである。したがって、このことばから、男が女を支配することになるよう、神が定めたかのようにとらえることはできない。¹⁷ つまり、神から離れた結果、女は男を頼らなくてはならなくなり、女性は相反する感情を男性に持つようになった。男性に惹かれ、男性なしでは生きていけないのと同時に、男性の権威と戦うようになったのである。¹⁸

人間が神から離反したにもかかわらず、神は人間を憐れみ、「アダムと女に皮の衣を作って着せられた」のである。(創 21 節) 神はあくまで人間と深くかかわる方なのである。人間を見捨てることなく、エデン追放ののちも、希望を与えられた。つまり、女の名前は「エバ、すべての命あるものの母」と名付けられたのである。エバの素晴らしい使命は、追放によって変えられることはなかったのである。しかも、人間の離反によってもたらされた呪いは、のちに「女の子孫」によって取り除かれる、と神ははっきりと約束なさったのである。

主なる神は、蛇に向かって言われた。

このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる獣の中で呪われるものとなった。

お前は生涯這いまわり、塵を食らう。

お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。

彼はお前の頭をくだき

お前は彼のかかとを砕く。¹⁹

おわりに

以上のように、『創世記』の女性観を見直してみると、その中には女性を軽視したり、従属的にみる思想はうかがえない。むしろ、男性と女性双方の平等性を強く主張していると言えよう。人はそれぞれ独立した人格を持ちながら対になり、各々の尊厳を保ちつつ相互に助ける者となったことを伝えようとしている。女性蔑視の風潮を生んだのは、やはり家父長制であり、男性中心主義の社会である。また、罪が女から始まったとされるのも、男性側からの解釈であり、人間としての誘惑に対する弱さは男女の別はなく、男女とも同時に神に対して離反行為を行ったことは明らかである。『創世記』が書かれたのが紀元前 10 世紀頃であることを考えると、聖書は当時すでに形成されていた家父長的な社会に対する警告、女性差別の糾弾ともとれる。

男性だけが神にかたどられたわけではなく、女性も同じように神のかたどりなのである。女性なしに男性が完成したわけではなく、女性も男性なしに完成したわけではない。さらにこの思想の中に神の真意が表されていると考えられる。つまり、神は父と子と聖霊の三

位一体であるが、これは神ご自身が三つのペルソナにおいて愛の関係を現わされることを意味する。「神は愛である」ということは、まずご自分の中で互いに愛することを示されていることをさす。そして、このような愛を人と分かち合うために、神は人間をひとりではなく、男性と女性とに創造されたのである。

そして、最終的に旧約聖書が教える女性の人格の尊厳と男女平等は、新約におけるイエスの救いによって成就され、女性は差別や苦しみから解放されるのである。

男と女はありません。あなたがたは皆キリスト・イエスにおいて一つだからです。
(ガラテヤの信徒への手紙 3 章 28 節)

-
- 1 日置孝三郎、「旧約聖書と女性」(『カトリック社会福祉研究』 第4号)、2004年、p.94
 - 2 一色義子、『エバからマリアまで 聖書の歴史を担った女性たち』、キリスト新聞社、2010年、p.9
 - 3 日置孝三郎、「旧約聖書と女性」(『カトリック社会福祉研究』 第4号)、p.95
 - 4 稲垣緋紗子、『聖書は女性をどう見るかー神のかたちとして造られた人』、いのちのことば社、2004年、p.16
 - 5 稲垣緋紗子、『聖書は女性をどう見るかー神のかたちとして造られた人』、p.23
18節冒頭のヘブライ語「ワウ」は接続詞ではなく、動詞の接頭辞にすぎない。「こうして神である主は」と訳せる。「それから」と訳す必要はない。
 - 6 同上書、p.9
 - 7 同上書、p.12～p.13
 - 8 一色義子、『エバからマリアまで 聖書の歴史を担った女性たち』、p.14～p.15
 - 9 同上書、p.15
 - 10 マイリス・ヤナツイネン 大平郁子訳、『旧約聖書の女たち』、幻冬舎ルネッサンス、2013年、p.11
 - 11 稲垣緋紗子、『聖書は女性をどう見るかー神のかたちとして造られた人』、p.25
 - 12 同上。
 - 13 同上。
 - 14 一色義子、『エバからマリアまで 聖書の歴史を担った女性たち』、p.17
 - 15 マイリス・ヤナツイネン 大平郁子訳、『旧約聖書の女たち』、p.20
 - 16 一色義子、『エバからマリアまで 聖書の歴史を担った女性たち』、p.20～p.21
 - 17 稲垣緋紗子、『聖書は女性をどう見るかー神のかたちとして造られた人』、p.29
 - 18 マイリス・ヤナツイネン 大平郁子訳、『旧約聖書の女たち』、p.20～p.21
 - 19 創3章14節－15節
この箇所はマリア像が蛇を踏んでいることに象徴される。のちにマリアから生まれるイエスが、神と人間との関係を修復することを表している。

参考文献

- 一色義子 『エバからマリアまで 聖書の歴史を担った女性たち』 キリスト新聞社
2010年
- 稲垣緋紗子 『聖書は女性をどう見るかー神のかたちとして造られた人』
いのちのことば社 2004年
- 日置孝三郎 「旧約聖書と女性」(『カトリック社会福祉研究』 第4号) p.89—p.102
2004年
- マイリス・ヤナツイネン 大平郁子訳 『旧約聖書の女たち』 幻冬舎ルネッサンス
2013年

※ 聖書は日本聖書協会発行の『聖書 新共同訳』を使用した。